

パネルディスカッション

荒尾 稔

ただ今、寒川様からお話をいただきました内容は、私どもはこれをパソコンを使って行われる、インターネット上で言いますとチャットといわれている方法の進化版かと考えます。市民からいま現実に起こっていることについて即座に発信するという段階では「ぺたぼ一ど」の考え方や内容は、とてもすぐれた方式であると考えています。

実験に参加された方々からチャットという形で発信をいただき、それに関して双方向でいろいろと意見交換が行われる、

その上で地域コーディネーターの方々が、これはまさに田中先生がおっしゃられましたように、データをNPOなり、行政なり、大学の皆様が精査してきちっと監査することを行い、即時に処理をするのではなく、随時処理とか、月次処理とかによって登録をするということが大事なことかなと思います。

会計的な手法になりますが、監査して改めてデータベースに登録を行う、プロセスを経ることによって、地域コーディネーターの方々を介して、地域の公式情報として蓄積され機能していくのではないかと思います。

これで講師の方々のご報告をいただきました。堂本知事もお越しいただきましたので、若干スケジュールをかえさせていただきますと存じます。そこで総合司会の荒尾に一度マイクを渡させていただきます

荒尾繁志

これから休憩をはさんでパネルディスカッションに入らせていただきますが、対話をしながらお話ができるようにと考えたのですが、教室のようなテーブル配置では、お互いにお話がしにくいので、顔の見える関係でということができませんので、ちょっと皆様にお力を貸していただきまして、楕円形に組み直しをして見たいと思います。

ちょうど知事もお越しいただいておりますので、最後までお話を聞いていただけるだけの時

間もあるということですので、いろいろとお話もうかがえるかもしれません。

(10分間の休憩)

荒尾繁志

これから後半の話し合いに入りたいと存じます。知事もお見えになりましたので、前半にお話をいただきました講師の方々より、改めて、おひとり3分程度にて、まとめていただいております

田中

お手元に本日のプロフィールとレジメがあるかと存じます。それに沿って3分程度でお話をさせていただきます。

私は「WEBGISによる自然環境情報の収集と共有」というタイトルで、京都府における取り組みの現状と方向性についてお話をさせていただきました。京都では、現在3つのWEBシステムが稼働しています。

このレジメでいいますと、

1つめは、京都府自然環境情報収集・発信システムであります。これはうちの大学が開発しまして、京都府の行政で実際に使っております。特にツキノワグマの目撃情報に活用しており、その内容は、この1枚もののチラシにまとめてありますので、もしご興味がおございましたら実際にインターネットで見ただけならと思います。

2つめですが、行政が収集した情報は、京都府では京都府の統合型GISにて情報発信しております。これは市町村の情報も一緒に発信しております。

3番目が、NTTデータ様が開発された「ぺたぼ一ど」というシステムでして、これを使って京都では、インターネットを使ってNPOが独自に情報を収集・発信しております。

以上の3つのシステムを使って WEBGIS 情報を発信しております。今回はその3つのシステムについて報告をさせていただきました。

そして、本日、私が申し上げたかったことは、データの管理についてです。京都では行政等が責任を持って収集したデータは統合型 GIS で一元管理して公開しております。一方、NPO 等が収集したデータの管理については、私は次のように考えています。まず NPO の活動エネルギーを保つためには、NPO 自身が創意工夫を発揮できることが大変重要であると考えます。京都には家元制度がありますが、それ故に伝統文化が継承されてきたという側面があります。それにならって、NPO の独自性や独立性を尊重する必要性があります。したがって、NPO が収集したデータのうち、公開可能なデータ情報のうちで重要なものを NPO から行政に情報を提供してもらうという考え方が重要ではないかと考えています。これが私の結論であります。以上であります。



呉地

手元にパワーポイントのスライドのカラーコピーがありますので、それを見ながら話を聴いてください。

環境省のインターネット自然研究所という HP があって、その中にガンカモの情報を扱う「全国ガンカモ類飛来情報」があります。

それが立ち上がったのがきっかけとなって、今までばらばらだった、雁の標識調査データなどが一括して管理されるようになりました。また全国のガンカモの生息地調査は、環境省が 40 年近く行ってきた調査データと、個人がばらば

らに蓄積してきたデータがありますが、このインターネット自然研究所の中にできた「全国ガンカモ類飛来情報」によって、それぞれ切り口の違うデータベースを結び、これらが一体となって機能することをめざし、インターネット自然研究所を経て、その中にいろいろなデータの蓄積を行って来ました。

データとしてはかなりの数が集まっていますが、多くの人に関心をもってもらうためには、面白みをもっとわかりやすく見せる仕組みが必要です。

データは数値だけで示すとわかる人にはわかっても、わからない人も多いので、地図のような視覚的なもので示すことができる機能を盛り込む必要があります。「全国ガンカモ類飛来情報」には例えば標識を付けた鳥であれば、標識情報を入力すると、その鳥の移動経路が地図上に表示され画面上で見えてくる、というようなプログラムを組み込んであります。それ以外にも、例えばマガンの全国での、県ごとの、1月あるいは、年ごとのデータを分けて表示できるなど、いろいろな切り口で表示できる仕組みを作ることによって、一般の人々に面白みを伝えることができると同時に、鳥を調査したり、研究の対象にする方々にも、データ解析に役立つ機能を試行錯誤しながら作り上げてきました。

多様な情報を一緒にするためには、整合性を取らないとなかなかうまくいきませんが、その過程で課題の洗い出しができ、それを解決するための問題点の提起も可能になりました。実際に運用し、動きながら、だんだん役に立つ道具になってきたなと感じると同時に、一方でこのような仕組みを運用していくと、それが大きくなるに従い維持が大変になります。このことは環境省にも伝えているのですが、それを持続的に維持できるような仕組みを作っていくことが重要なのかなと感じています。

山崎

「ムクロジの里」の世話人の山崎です。私は今日のテーマを別の視点で、このような生き物調査を市民がやっているのだよということを提供させていただきました。私どものフィールドには「ムクロジの里」という名前を付けて



います。小規模の里山ですが、市街地と里地の境目にあり、考えてみると面白い

テーマのある場所と思っています。

そういうところを私どもはメダカ視点から出発したのです。

メダカが生息できる環境を何とかしたいなというところから、適した環境を目指してきましたが、結局メダカだけでなく、生き物全体を見ていく必要があるだろうと気づきました。ということで、私どもの活動の中で調査とまでは言えませんが、生き物全体を観察し、メモとして記録をつむぎ出したのが発端です。

それによって何が見えてくるのか。ただ先が分かっているわけではなく、長く見ていくことによって、1年や2年では見えないものも、すぐ分かるものでもないだろうけれど、続けてやっていくことによって何か意味があるのではないかと、それだけで、ご紹介させていただいた調査を始めたのです。

それで、やってみることで、参加者、それを見ている市民の人々がこの場所と自然に関心を持つようになってきました。これが非常に嬉しいことです。

普通の自然があってはじめて生物多様性は成り立つことを、もっといろいろな方々に知っていただくきっかけにもなっていくのではないかと思います。

今、会の活動と共に、この調査も継続をすることが必要であって、継続こそが力なりと。それと会員制ではありませんので規制することはできません。来ていただき、参加いただいた方々に、思い思いの自分に合った作業をしていただくと同時に生き物の情報を自主的に提供いただく。ただの作業だけではつまらないですよ。生き物目線で作業するから面白みがあるのだと思っています。

このように一般市民がやっている、自分勝手な方法ですが、なぜか続いています。

私どもがやってきた方法が一番よいとは思っていません。自分たちなりにやってきたことの結果であり、ほかにもっとよい方法が必ずあ

ると思います。もし皆様の手法をもっと公開していただければ良いのだと思います。この調査法や結果に注目していただき嬉しいです。

寒川



NTT データに務めておりますが、開発する立場ではありません。「ぺたぼ一ど」にたずさわる営

業的な立場です。ご了解ください。

えーと、3つの資料で体制という資料があります。八千代オイコスというNPO法人が、行政と市民の間の中に位置付けて、行政の情報と八千代オイコスの蓄積した環境情報を、八千代オイコスの手法で発信する。

わかりやすく言うと行政情報、そして市民からの情報を、自然環境だけでなく、生活情報をも含めてインターネット上に発信をする。

市民側からでてきたいろいろな意見を行政側にも伝えるという役割を担う。その内容については先ほど知事がお見えになって話させただきましたので省略させていただきます。

荒尾繁志

WHBGIS というもの、あるいは「ぺたぼ一ど」というものを使って情報が蓄積されて、市民の皆様も利用できるようになるということはわかったのですが、これをどのようにして生かしていこうかということが、私どものテーマなので

すね、それに関していろいろと意見を交換させていただきたいと思いますので、分科会会長の荒尾稔のほうへマイクを渡したいと思います。質問もあるでしょうし、お聞きしたいこと、ご提案いただけること等をじっくりと時間いっぱい、よろしく願い申し上げます、

荒尾 稔

それでは、5時までということですが、時間を押していますので、パネラーの方々からお話をいただきました内容に関し、それぞれの角度からお話を進めていきたいと考えます。ま

ず改めて田中様から、開発をすすめてこられた中から、この点が特に重要だということなど、お話しを頂けませんでしょうか。

田中

私、今日の話の切り口の一つとして、文化と文明といった側面があると思います。WEBGISというのは、これから最新のIT機器とかWEBGISの技術が進んでいきましても、それは文明的な進展でありまして、そこで取り扱う情報は文化的な側面を持っているということです。文明と文化のバランスをどう考えるかということが、いちばん難しいところだと思います。

いくらITとかWEBGISの技術が進んでいきましても、それを使う側の方の体制作りがとても重要でして、その点をひしひしと感じておりまして、そのための社会システムのようなものをどの様に構築していくかが、これからの最大の課題になるのではないかと感じております。

荒尾 稔

呉地様 改めて追加的にお話をいただくことは

呉地

田中先生もおっしゃっていましたように、ITの活用もそうですが、使いこなしている人は、ともかく便利で面白い世界にドンドンが入っていきませんが、その一方でITに無縁な人もいます。自然に接している人には両方のタイプがいて、ITの世界に入っていける人と、入って行けない人がいます。ITは便利ですが、気をつけないと、わかる人たちだけでやり取りをしてしまいがちになります。ふと気がつく情報が、伝えるべき先に、均一に伝わらず、いびつな形になってしまったと感じることがあります

すべての人がIT等にぶら下がっているわけではなく、多様な人間がいます。多様な方々に対していろいろな情報が発信できるようなことを考えていかないと、とても良さそうだけど大きな落とし穴に落ちる危険性をはらんでいて、時折感じます。それをどうやって解決していったらよいか、簡単にはいかない問題です

が、このような意識を持つことが大事かなと思います。

山崎

私は、今日は「ムクロジ会」世話人という形で参加させていただいています。四街道にはこのような自然にかかわる様々なグループがあります。

そういうところで、それぞれの目線で調査に値することをやっているわけです。たとえば、メダカの会としては、水辺の生き物調査—魚介類を含めて市内の主要河川の調査を毎年毎年行っています。ムクロジ会の調査は2004年からですが、この川の調査は2001年から毎月のように行っています。それらの調査データを継続して持っているわけです。

それから四街道自然同行会では、市内のほぼ全域のホタル調査を、これはさらに前(1994年)からやっているわけですね。ホタルについても、最近では地域住民の方々が保護活動をしながらか同時に観察会や、調査をやっているという形になってまいりました。

このように、いろいろな目線で活動がおこなわれているわけですが、今回のテーマからいって情報の活用ということでは十分ではないなと思っています。なかなか自然環境の保全につながっていないなと感じているからです。そういった点で、これらはある一団地でやれるものではないとも思うのですけれども、八千代オikosのように、市民と行政の間に立っていただけることは、すばらしいなと思っています。どこでもできるわけではなくて、行政の立場によってそれがやれるところとやれない所とが、協力的なところと、協力的でないところとありますので、なかなか難しいところもあるかと思えます。

そういう問いが本来あったほうがよいのか、なくてもよいのか、そういった角度での議論があってもよいのかなと思います。

データはいろいろな場で活用されてしかるべきだと思います。ただ保護の角度でいいますと、希少種はどこまで出せるか、どなたかの発言がありました。四街道市にも現実問題としてあります。どこまで出してよいのか非常に悩みます。WEBで発信していますからどこまで提供し

てよいのやら。

あそこに、こんな希少種があると分かれば荒らされることもなります。やはりそのあたりを、活用に関しても、公開が出来るか否か、皆で総合的に議論してゆく必要があると思います。

寒川

くり返しになるとと思いますが、インターネット上の情報が、それがすべてではないとして、その通りです。気をつけなければならないと思います。そういう意味で、先ほど最後に触れました地域コーディネイターというものは、やはりある部分だけの情報だけでなく、いろいろな情報を見極めた上での、橋渡しをしていかなければならないと、その上でそれをしていく必要があるのかなと思います。また、インターネットを使った情報交流に仕組みとして2つ考えています。政策提言ができたということは置いておいて。

本日お話をしなかった中ではモニターを募集したときに、そのうちの1/3位は90年度にもその方々は八千代を知る上で重要な役割を担った方々。その時に情報の信頼性を十分に吟味した上で、情報を提供していかなければならないということがあるのですが、そういうところで地元のことを知っているツールということが結構役に立つものなのだねと思っています。

もう一つは、全体の参加者の中で発信してくれる人は約半分、残りの半分は俗に言われる「見ている人」、その人も最後にアンケートをとってわかったことは地元の、再発見。希少性の高い植物が自生しているということを友達にも話して広げていきたい。家族にも話したいと言っていたことがわかります。

少しづつですが、地元の良さを知らうことのためのツールとして、新しく市に入ってきた人々と地元との交流という観点で、ツールとしての役割というものがあるのではないかと、一方で、それをも極めたうえで、それだけの情報ではなくてもう少し幅広く展開する情報ツールとしての役割を果たしてくれると思います

荒尾 稔

そうしますとひとつ地域に新たに入られた方々の、このような世相の中で地域でも、会社でも、どこでもコミュニケーションの取り方が難しくなっている。特に携帯電話は管理ができない、子供たちがいま何をしようとしているのかわからない。世相としてあるわけです。「ぺたぼ一ど」のようにある面では公式とまではいなくても、情報をやり取りする場として広げるといようなことについてはどのようにお考えですか？

寒川

難しいですね。ひとつは事実情報を集積する。それがまずあります。そこから先のことは考え方が、いろいろとあると思いますし、それを認め合うという前提がないと、コミュニティは成立しない。そこを仮にネット上でのコミュニティとして実現させるのであれば、そこでのポリシーをきっちりとしつかりと伝えた上でネットワーク上でのコミュニティを作っていく必要があります。そこが要でもあり、そこに運営者側の運営責任もあります。

荒尾 稔

山崎様、ひとつ伺いたいのですが、今、何百種類位をも対象に調査を行われていますが、動物から、植物から、微生物まで、いろいろな調査を毎週、過去5年間も継続されておられ大変なことだと思います。かつ、そういう方々に毎週参加を頂きながら、自発的な運動参加かと思いますが、金銭的な問題はないとしても、やはり経常的にできていることは素晴らしいことと個人的には思いますが、なにかここまで持ってこられるまでの秘訣というか、いかがでしょうか。

山崎

特に秘訣とまでは言えないかもしれませんが、せっかくこういう自然環境の良いところで、皆さん作業をしているわけですから、自然を見る目を育み、自然を知ってもらうことで作業の仕方も、やり甲斐も違うのではと思います。その興味がつながって、参加する人が続いているのではないかなと思っています。もしこの調査をやっていないければ、僕は続いていなかったと

思います。お互いに、私もそうですが、勉強しあうのですね。そういうことがつながりになっていくのですね。そういうことがないと、ただ作業をやりましょうでは、辛くて飽きるのですね。作業だけでは。

ところで、田圃を復田するなどは、行政は簡単に言いますが、そんな簡単なものではありません。

荒れた土地の復田とは、スコップで一区切りひと区切り 5cm~10cm 程度ずつ進めてくこととなります。草の根が絨毯状に広がっていますので、トラクターでは起こせません。研いだスコップで一刻み一刻みしながら地道にやっけないととても復田できません。ところが復田できると逆に泥沼化します。今度は耕運機が入れません。埋もれてしまいます。上は草の絨毯ですが、その下は泥沼になっています。そういうところでは簡単に復田などできません。

実際的にやってみて、本当に大変だなと思います。そういうことからただ単に復田、復田と簡単に言えますが、実際に復田してみても本当に大変だなと感じます。簡単に言いますが本当に真剣に考慮しなければなりません。

話がそれましたが、こつ、はひとつですね。今言いましたように生き物目線で行うこと、生き物に興味を持つことです。更に挙げれば、間に必ず中休み入れることですね。ここで皆さんただ何もなければお茶を飲みあって、雑談をしますが、何かわからないことや問題点があると、すべてこのときに現地で決めるのです。あらかじめ事前に何かを決めておくのではなく、外部からああしてこうしてということを決めるのではなく、そこにその日に集まった人たちでおしゃべりをしながら決める。そういうやり方をしているのですね。

そこで参加意識が強くなる。人が言っているからそれに従ってやるのではなく、提案しながらここで決めていく。いろいろなことの提案があるわけですが、でも目線は一つ、一定化しているのです。

そこにある自然を大切にすると。そこが基準になって考えていく。それが大切なのですね。そこだけは皆で認識し合っています。そういうこと（秘訣）だと思います。

荒尾繁志

ムクロジの里から本日、そこに参加されているお2人がお見えです。高橋さん、補足をしていただけますでしょうか。いかがですか。

高橋

現場に行くとホッとします。そこにあるものを大切にすると。自分を大切にしてくれることがわかる。よくまあ根気よく4年間もメンバーが毎木曜日ですよ。9時から12時すぎまでですよ。

それを山崎さんが前もって準備するわけですよ。それが次の日には必ず評価を出しているのです。調査し内容を。郵送で出しているのですよ。それが200号以上ですよ。

山崎 正確には232号ですね。

高橋 それがメールで来るのですね。それを楽しんでいる人がいる、メールをやれる人と、やれない人がいるのですね。そのやれない方のために印刷をして配布されている。その積み重ねです。その自然を少しでも大切にします。言いたいことは、里山を大切にしている人たちです。でも野菜もやっつけられる方もいます。ところがそこが、だんだん休耕田化していく、地産地消と言いますね。宮崎県のように宮崎産全国に運動。千葉は、もっと小さく言えば、四街道で作られる農家の方々の食べるものさえもつukれないような、だからこそ農家の方々と地産地食の仕組みを作らないと、里山に自然を守るといことになりわい(生業)もなくなってしまいます。朝市も3年以上続けていますが、やはりおいしいから毎週ついつい、買いにくるのでですね。

荒尾 稔

日本雁を保護する会でも、私もそのメンバーの一人として、とにかく北海道の北のはずれのサロベツなどで、真冬ですよ、朝の4時から5時ころ起きてですね、雁の飛びたち調査を、また1日ばかりで何十ヶ所をも調べて歩く。何年も何年もやっつけられる方々がおられますが、呉地さまのお考えとしては山崎さんの、いまのお話を聞かれ、どういう感じなのですかね。いかがでしょうか

呉地

誰でもそうですが、面白いこと楽しいことをやりたいのです。環境に関わる取り組みで、最も悪いパターンは、変に頭でっかちになって、現場体験や体感が欠落する事です。

順序として、最初はまず現場を体感することだと思います。自然の面白みや凄さを感じ取ってしまった方々は、そこから抜け出せなくなっていくわけです。

最初に出会うものは、人によってさまざまですが、その中でも雁という鳥は、インパクトに強いと思います。

たとえば、万葉集には、柿本人麻呂が巨椋池（京都の宇治川など3つの川が合流する遊水地）のほとりで詠んだ歌があります。

「巨椋の入江 響なり射目人の伏見が田井に雁渡るらし」

これは雁(ガン)の群れが早朝に鳴き交わしながら一斉に飛立つ時の様を読んだ歌で、その様子を「響なり」を表現しています。

朝のガンの飛びたちは、すごい迫力があり、言葉ではうまく説明できませんが、それを体感した人は、心酔してしまいます。それはたぶん今の人も同じだし。万葉の歌人の柿本人麻呂も同じだったと思います。

そういう点で生き物自体は、1,000年たって全然変わっていないのです。人間は生き物としての原点である生命力を、文明の中でどんどん喪失してきているのです。

だからこそ、生き物に触れて、自然からエネルギーを頂くというようなことは、現代人が積極的にしなければならぬことだと思います。そういう点で雁という鳥は、たぶん他の鳥よりも人を圧倒する力が大きいのです。そうすると北海道の冬、特にサロベツは寒いですが、寒い中で起きていくと、そのような出会いがあると思うと、暗くて寒い中を起きて出かけることができます。暗くて寒い中を起きるのはつらいけれど、そのつらさ以上に面白いものがあれば、人は耐えられる。強い思いや大きな夢を持っている人は、大変なことをやっても本人はそれをつらいとは思わないし、苦とも思わない、そういうことだと思います。

荒尾 稔

ということは、呉地さんの話も山崎さんの話も、共通していることは、仕事というよりは自分の楽しみ、生活というよりは、ひとつの余暇。そして輪ができています。そして輪の中でお互いを高めながら、一つの生活のリズムがうまれてきている、そういう事なのかなと思います。

田中先生そういう点で、文明と文化とおっしゃられていましたが、その角度からひとつご意見をよろしく願います。

田中

私、本日ここに来まして一つ勉強したことがあるのですが、それは一言でいうと生活空間がどれほどの大きさなのか、対象とする空間の適正規模のようなものがあるのではないかなと思いました。

私自身が、クマの目撃情報のシステムを作る時は、空間として京都府全域を考えました。それは行政的な枠組みの中で捉えていたからです。

もうひとつ、NPO用として「ぺたぼ一ど」を利用しているのですが、「ぺたぼ一ど」の方はほとんど利用されていないというのが現状です。京都の鴨川のゴミ調査の皆さまには、一番多く使っていただいておりますが、それは唯一の例外です。

私は当初、山間部で利用していただけないのは、山間部の地図には等高線が入っていないからだと思っていました。しかし、今日ここにきてハタと気がついたことがあるのです。それは「ムクロジの里」の話と八千代オイコスのお聞きした時に思ったのですが、両者に共通することは、極めて限定された地域の中で取り組んでおられるということです。「ぺたぼ一ど」が多く使われているのは川を対象にしているものですが、その川は区域がかなり限定されており、自分たちの生活空間の中を流れる鴨川のゴミを観察する目線なのだということに、今回ここにきて改めて気が付きました。

WEBGISが対象とする区域というものが、その

適正区域というものが、それにかかわる方々の生活空間の大きさや、顔の見える関係のようなもので大体決まってくるのではないかと思います。そういうことの重要性について気がつきました。

荒尾 稔

里山の保全ということを考えたときも、「里山シンポジウム委員会」を主催していて、5年にもなりますが、当初考えてきたことと大きく考え方も、結果も変わってきています。

それはNPOの力をもってきても、行政の力をしても、どんなに頑張っても里山ひとつ、地域の中で保全しようと考えてもどうにもできないという現実には直面しています。

里山そのものをその地域の中で再生しようと考えても、どうしても絵空事となってしまう。それは主体性の問題があって、そこを所有し、生活されている方々の、地権者の本人の気持ち次第だということです。そこで生活されている方々の主体がどうなのかと、自立して、なりわいとしての生活が成立しているのかとの解析が必要になってきています。

里山とはなりわいの場として、生活が成り立つか否かがもっとも大事なことだと気が付いてきているのですが、生活というより生きざまとして、これが素晴らしいのだということを併せて、そういうことも大事なことなのかとも気が付いてきています。

堂本知事、いかがでしょうか

堂本

今日は途中からでしたけど、お話を聞いてとても面白く、質問がたくさんあります。マイクを回してもらいたい、と思っていました。(会場から大笑い)

今までのお話の中で聞きますと、実際に四街道で山崎さんが、八千代で寒川さんが展開されている活動は、それぞれの地域に密着していて本当にどちらも素晴らしいと思いました。

呉地さんは、仙台でマガンの観察をしておられますが、その活動の範囲はロシアにまで広がっています。

ところで、日本で初めての「生物多様性ちば県戦略」が出来上がりました。この戦略はできあがるまでのプロセスに特徴があります。県庁職員が素案を書くというようなことはせず、トップダウンではなく、最初から県民参加型のボトムアップに徹してきました。県内各地のローカルな活動を土台としてNPOのメンバーや千葉県立中央博物館の研究者や行政サイドも参加して何十回ものタウンミーティングを開き、議論を重ね戦略を練り上げました。その後、国レベルで生物多様性基本法ができ、他の都道府県でもそれぞれ県戦略をつくらうとしています。

10年前に植物学者の岩槻邦男先生と「温暖化に追われる生き物たち」という本を編集しました。1992年の「地球サミット」において「気候変動枠組条約」と「生物多様性条約」の2本が採択されたにもかかわらず、国際的にも国内的にも温暖化に議論が集中し、生物多様性がないがしろにされてきたきらいがあります。しかし温暖化が地球の生態系、そして人間を含む生物種にどのような影響を与えているか、ということが最大の課題であり地球が直面している環境問題の本質です。そういったことが書かれた本なのですが、10年前には温暖化と生物多様性を一元的に捉える視点は非常に少なく共感を得ることが困難でした。昨年(2007年)になってIPCC(気候変動に関する政府間パネル)が「人為的な行為による温暖化が生態系に影響している」との発表をしたことにより、やっと温暖化による地球規模の生態系への影響がクローズアップされるようになりました。

岩槻先生が最近強調しておられるのは、21世紀の科学の方向性とは生命科学と情報科学の2つが、どのようにして結びつくかという点であり、その情報収集を行うのは、学者や研究者だけではなく、「ノンプロフィット・ナチュラリスト」におうところが大きいという点です。岩槻先生はアマチュアという表現は使われません。専門家より詳しい観察を続けているナチ

ュラリストは多く、貴重な仕事をしている、との観点からです。つまり四街道の山崎さんのように地域でしつこく時間をかけて実態を観察し続けている人の方が下手な学者よりも優れた専門性を身につけているという意味です。千葉県では生物多様性センターを設置しましたが、これから県内各地の生物多様性に関する情報を集めるには地域で活動しておられる「ノンプロフィット・ナチュラリスト」に期待するところ大です。

山梨県にある国立の生物多様性センターが十分に機能していない、と言われていますが、国には県のように現場がない、さらに手足となる「ノンプロフィット・ナチュラリスト」がないためでありましょう。国と違って県の場合は県内各地にNPOなど活動の拠点があり、博物館やその出先のサテライトなどもあり、活動している人の顔が見え、日常的に連携することが可能なので情報収集のシステムが作りやすいメリットがあります。

環境省から「千葉県に生物多様性センターができたことは有意義であり、県レベルで収集した情報を国の生物多様性センターに集めるシステムを構築したい。それためには千葉県だけではなく各都道府県に生物多様性センターをつくって欲しい。そして国から国際的な情報システムである GBIF につなぐのが理想」と言われました。

私たちはタウンミーティングを県内各地で数多く開き、ボトムアップの活動を展開する中で、参加した人がお互いに知りあい、連携するようになりました。いすみ市などでは、里山で働いている農家の人と里海で働く漁師、そしてサーファーが出会い、山から海まで夷隅川流域の保全と再生に取り組んでいます。

呉地さんの言うようにNPOの活動が大きくなってくると組織を維持することが難しくなることがあります。そうした時に行政とのコラボレーションをどのようにしていくか、が課題です。さっき田中さんのいわれたように行政がで

しゃばるのはよくありません。NPO はどこまでも民間として、可能な限り自己発信し、自己増殖していくことが大事だと思います。

もうひとつは文化と文明という話が出たのですが、確かにあまりに自然科学に偏ることなく、文明をどう取り込んでいったらよいか、が今後の課題だと思います。

「見つけよう、考えよう」そして地域の再発見、という八千代市の活動は素晴らしい。こういった、機能的、実用的な仕組みが実現していくことはとても良いと思います。

最後に申し上げたいことは、やはり地球生命系の保全と地域での活動の両方の重要性で、両者が相まって私たち人間を含めた生き物を守るということに繋がるのだらうと思います。

荒尾 稔

堂本知事、どうもありがとうございます

この会場は6時まで、お時間が追っていますが時間を延長させていただき、語りつくせないということで、まだまだこれからというところがありますので、もしお残りいただけるのであれば、ご一緒によろしいでしょうか。

引き続きまして、田中先生、肝心なところでございますが、市民から情報を収集して、それをどのようにして、データとしてまとめていくかということが、最も肝心なところと伺いましたが、現状とこれからのお考えをお聞かせいただけませんか

田中

現在まだそこまでいっていない段階です。とりあえずデータが集まってきている段階です。

それで、今の質問にはそれる形になるかもしれませんが、別途、質問が来ています。

それに回答をしていきたいと考えます。

「管理システムのデータ管理者は行政担当者一人ですか。一人としたら、そのひと一人の経験知識で、客観性のない判断が入り込む余地があるように感じますが、複数の監査が必要であり複数の追跡調査も必要ではありませんか。それで客観的なデータ監査が出来ますか」とい

う質問が届いています。

これについて、京都府ではツキノワグマのシステムと、外来生物のシステムと2つがあり、その中味がちょっと違います。

ツキノワグマ調査では、担当者が一人張り付いています。実は農林水産部がツキノワグマのことを担当していますので、出先機関がいっぱいあるのです。実際にクマの目撃情報がありますと、先ほど知事からサテライトというお話がありましたが、クマは人命にかかわるということで、必ず出先の職員か市町村の職員が現場に行き確認をしています。その意味では複数の目で確認しているということですので、この情報はかなり確かな情報です。

一方、外来生物の方では、いまアライグマとヌートリアをやっているのですが、こちらは京都府の中で文化環境部に属していますので、いわゆる出先がありません。本庁だけなのです。本庁の中に一人いるだけで、あとは市町村にお

んぶしているわけです。特にアライグマ目撃情報は他の動物との見間違いが多くて、そのチェックが難しいです。これが現状です。

ですから、さきほど堂本知事がおっしゃったように、サテライトがあることの重要性が高いということになります。京都府でも市町村の広域合併が行われて、それに伴って府の出先機関も統合されてしまい、なかなか現場に出て行く機会が少なくなっており、そのことが課題だと思います。

そういうことで、ツキノワグマと外来生物では、データの質が違っていて、ツキノワグマのほうは質的にも信頼できるので、今後GISを使った解析ができていけるとと思います。ですが外来生物に関しましては、まだそこまでの段階に至っていない状況です。

これで答えとなっているのでしょうか。

ワークショップ

荒尾繁志

ありがとうございました

今、サテライトシステムの問題が必要になってくるとの意見を頂いているのですが、本日参加いただいている皆様の中に、国の環境省の生物多様性センターの方がおられますので、そのサテライトシステムに関して、どう考えていられるのか、ちょっとお答えいただきたいのですが、

坂口様、恐れ入りますがよろしく願い申し上げます

坂口

先ほど堂本知事から話がありました。環境省の山梨にあります生物多様性センターから来ました。今日は呉地さんをはじめとして、いつもお世話いただいている方々のご発表をされるということと、里山について調査をしておりますので、本日はいろいろとお話を承ることができまして、非常に参考にさせていただきました。

いまサテライトシステムという話もありました。実は、堂本知事からも、国の方でサイトを持たないことも機能していないひとつの大きな原因ではないかとの指摘もありました。

そういった今までの調査、基礎調査などやってきたのですが、やはり現場では生態系の変化を、特に地球温暖化が問題になってきているということで、「モニタリングサイト1000」ということで、5年前に立ち上げてまして、全国に1000ヶ所。サイトを設置して、さまざまの生態系でのサイトでありまして、森林もあれば、今日のテーマであります里山のサイトも立ち上げています。そこでサイトの業態を調査するというところで立ち上げているわけです。目標としては100年以上継続をしていただければならないとしています。で、その中のひとつには、ガンカモのサイトである呉地様にもお世話になっていきます「ガンカモ類の生息調査」、湖沼とか湿地での調査をサイトでやっております。

それから「ムクロジの里」のご紹介をいただきました山崎さまには、今回里地の一般サイトの公募を2月に行いまして、それで、「ムクロジの里」もご応募をいただきまして、今年度

から調査をはじめていただくことになりますので、そういった形で里地のサイトも合計200ヶ所。サイトで調査をしていただくことになります。

そういったところは先ほどの、呉地さんの方から、朝5時から夜明けとともに調査をしていただいたり、それから「ムクロジの里」では、毎週木曜日になされている調査情報を提供をいただくことになるかと思うのですが、本当に現場で関心あることをやっていただくわけで、トップダウンの考え方ではいけないと、田中先生からの、情報共有のシステムがやはり重要なことではないか、それは調査現場の方、そして私どものような行政の方々、そして実際に管理している団体の方もおりますが、そういった利害関係者の方々も情報を共有化していく、その結果で議論をしていくという方法が理想的であると、私どもも思っています。

ただしそれを完成させるためには課題があって、先生がおっしゃられましたごとく、やはり情報の提供していただく、データを収集していただく市民の方、やはりひとつは希少種のような情報を人に知られることが嫌だという方、それは当然として情報の公開時点で、情報公開法で、勿論情報は公開できないとなっていますので、何らかの形で情報を提供いただく仕組みはできると思いますが、またそこまではいかないけれども、過去にたとえば干潟でシギチドリのデータを出してくと、その開発にかかわる企業がその情報提供を求めて来ても、やはり情報の公開はできない、そこでうちのほうでも情報の協力、フルに生データの情報提供はそういうこともあって、すぐにはできないという当たりまえのことです。そのあたりをどう解決していたら良いのかが一つの問題だと思っています。

そのひとつは、やはり提供していただく側と、私たち保全する側との、データの活用を積極的にやっていかなければならないと、データをとっていただいてもそれをどういう風に公開していただけるのかがわからないでは、困るといっていい風にインセンティブがそうでありまして、拒絶されても困るといっていいことになります。

活用する側が、行政側が目に見える形で施策に反映していかなければならないと考えます。それは国レベルでも県レベルでも市レベルでも、同じことだと思います

で具体的に施策に活用するとして考えていくと、呉地さまが紹介をいただきました、たとえば湿地の目録と言いますか、ガンカモの目録等がHPとかWEB上等でどんどん出していって、そうすると、集めたデータが活用されて出ていくということになります。

そういったことがやはり、仕組みを作り、活用していくということがやはり情報提供側のインセンティブになるのだらうと、そういったことで教育が進んでいくのだらうと思っているのです。

まあ今私どもの考え方としては、そうなっているのですが、やはり問題があるのだという意見もありますので、私どもにも教えていただけたらと思います。ありがとうございました。

お答えになっているかといえば、サイトという、それぞれの責任者がまとめていただいています団体を大事にして、そこで情報の共有化を図っていくと考えています。

荒尾繁志

ありがとうございました。あの私がお願いをしましたのが、いまお話をいただきました内容から整理をしていきますと、生物多様性をどのように守っていったらよいかということに行き着きそうですね。

それを一寸延長して、オイコスの理事でもあります加藤賢三さんに、ちょっとお話をさせていただこうかと思いますが、

加藤

八千代オイコスの代表を6年間やりましたので、この4月で卒業させていただきました。まあこの付箋紙実験のときは、まさに代表で苦労した面もありましたけれども、これはコンセンサスと言いますか、住民が考えていることと、行政の考え方をどのように話し合いの場を作って話し合っていこうか、輪を作れるかというこ

とで工夫しました。

従来は、市民が意見のあった場合に、手紙を書いて、それに責任者が答えるという方式ですが、それをやるだけでは解決がつかなくて、市民とか県民の方々はいろいろな意見があって、市民同士でも同じ問題を議論する場ができたということが「ペタボード」を使って実現したわけです。ある程度討議した市民同士の意見を行政に持っていくという先進的な事例であったのです。これは5年前のことですが、これからはこのようなことが県レベルでもできるのではないかなと、思っていました。田中先生から、こういう情報交換を密にするにはあるサイズ（議論しやすい人数）があるのではという、ご意見は重要だと思いました。

話がちょっと、合意形成のところに入りましたので、サテライトの話に戻します。G20に向かつての3月8、9両日の話の中で、最も印象に残ったものとして、生物多様性の保全へ持っていくにはトップダウンではだめでボトムアップが必要ということです。つまり、生き物調査の専門家の方々の人数は限られている。そうすると多くの調査をするには、多くの市民がかかわっていかねばいけない必然性が出てくるわけです。そのかわり方がサテライトなのか、どういう形が良いのかを今、考えなければならぬのではと思いました。簡単ですがインターネット付箋紙の体験者としての意見としまして。

荒尾繁志

それでは堂本知事、よろしくお願い申し上げます

堂本

私はその意味において、サテライトは、多ければ多いほど良いと思います。先ほど言いましたがノンプロフィット・ナチュラルリスト、つまり市民の活動が期待されます。やっているうちに関心を持つという話もありましたから、そういう人が増えていくことによって環境問題に対する県民の問題意識も変わっていくのではないかと思うのです。

日本の場合には温暖化対策については法律で都道府県、市町村が計画を作ることが義務付けられています。生物多様性に関しては、いままでは、国家戦略があるだけで、都道府県や市町村に計画作りが義務づけられていませんでした。今回、やっと生物多様性基本法が成立したので、各県がそれぞれに生物多様性センターを持つようになるかもしれません。そこにさらにサテライトという言葉が適切か、どうかはわかりませんが、あらゆる NPO、あるいは個人でもいいですが、裾野の広い情報収集のシステムをつくりたいものです。

生物調査をするには現在の 200 ヶ所ではなく、何万、何 10 万という人が集めた資料を、国の生物多様性センターに集積すべきです。それを世界のレベルに集積していく。現在、GBIF では世界で約 1 億しかないデータを 10 億に増やす目標がありますが、日本もその目標の達成に貢献したいものです。

荒尾繁志

後ほど回します。ありがとうございました。まわします。

新潟県の十日町里山センターから来訪されました三上さんと永野様、十日町の状況をお話いただけたらと思います。

永野

突然振られて何を話そうかと、われわれの里山は千葉県の里山とは比較にならない小ささです。人口 2,800 人を切っているような街です。合併して 60,000 人ほどになったのですが、人が最大の絶滅危惧種という里山で活動（笑）をしています。生き物だけはふんだんにいます。どう里山を守っていく上で、人をどう絡めていくかということがうちの地域の課題であり命題です。ひとのネットワークを作っていく上でも、今回の WEBGIS で IT ということに興味関心を持っていて、我々も一生懸命研究を進めているところです。

そうですね、本日ボトムアップという言葉も

非常にあったのですが同感です。我々もボトムアップでどのように作っていくかと考えているところにして、IT を使っていく上でいろいろな情報をボトムアップの仕組みは非常に大変であり、難しいところで意義のあるところなのですが、もっとも難しいのはボトムアップしてきたいろいろな情報を、どう集約していくか。そこが難しくて重要なところと考えています。

今までの話の中でもいろいろの情報をボトムアップしていき、重要な保全情報、いきもの情報として、あげて行くという仕組みでのお話があったと思います。それをそこから担当している WEB サイトまでしか上がっていかない。さらに上には上がっていかない。さらにそれが最も千葉県や千葉市のような大きなところでは重要なことかなと思っています。

われわれの小さな市ではありますがいろいろな活動をしております。鳥が好きな人の団体、植物の好きな人々の団体、田んぼづくりの団体など様々な団体が、それぞれで HP やブログなどをもっているのですが、そこでとても面白い情報を上げてくれています。

そのページ自体を、活動的で面白いのですが、それをどう地域全体の活動としてどう結びつけるのかが、それを里山の保全、地域の活性化に結びつけていくか、が、難しくてそれを研究しているところです。

手前みそですが、それが総務省の支援をいただいている「ダイジנגガープロジェクト」ということを行っていまして、ダイジנגガーとは大事なものという略で、大事なものを集めて情報を発信していこうというところで考えています。

地域、団体、個人にそれぞれに各ブログを提供して、あなたは生き物が好き、あなたは民話が好きというように、じゃあ、このシステムでブログを作っていただいて、個別に相談をしながら情報を発信してください、としましょう。その中でブログとは個人の関心のあること、生き様等を発信していただくものなのですが、発信者、情報提供者は自分の情報を提供していただけないのです。それを WEBGIS および IT 技術を使って、実は一つにまとめていっていると、そ

れをひとつの地域情報として発信していている、それがわれわれがやっていることで、作りかけでして、まだうまくいっていません。

そこで皆さまもここの会場でここの情報アップの情報をどのようにまとめていただけるのかご教示いただければありがたいなど。特に千葉県は先進事例のまちなので集められた多様な情報をどのようにまとめておられるのかを、ご教示いただけたらなと思います。

荒尾繁志

ありがとうございました。それでは千葉県の生物多様性センターの熊谷さん、知事からの投げかけについてご回答を頂けますでしょうか

熊谷

生物多様性センターの熊谷と申します。いまのその GIS でどのような情報を集めていただけるのかということについて、お答えすることはとても難しいですが、先ほどからいろいろ伺いまして、県としては、センターとしては情報をいかに集めて、それを検討していくかと主要な課題だと思っています。それでいまは千葉県中央博物館がございまして、そこに膨大な蓄積情報があります。たくさんの 50 万点くらいの標本のデータなど、そういったものを集めたり、あと、これは喜んでいいのかわかりませんが、非常に多くの開発がおこなわれてきました。これまでに法律や条例、その前の要項などを含めて環境アセスメントがたくさん行われています。それは非常に多くのデータです。100 点以上になります。アセスだから開発されてしまっただろうと考えられる方々が多いだろうと思いません、開発地域の外周までを含めてかなり調査されています。またアセスというものは実際はやられたものの、多数が実は事業化されていません。そのためたくさんの情報が集められています。

現在その情報をいかにまとめていくかということで作業を進めています。実はそういうデータだけでなく、本日多数のお話を聞かせていただきましたが、実は行政が集めてきた情報というのはかなり限りがあります。

実際に市民の方々が実際に集めてこられた情報というものが、10 年以上とした継続情報、あるいは地域全体を網羅した情報など、行政がやはり苦手な情報としてなかなかできない。それはそれとして、それをやろうというよりは市民の皆様がそういったデータをお互いに共有して利用していくと、やっていくことを考えています。その点で本日いろいろと伺わせていただきましたが、どういった仕組みで作り上げていったらよいかは課題だと考えます。

最初に田中先生が、いろいろな利害関係者との議論の中で、WEBGIS を介して、そのデータを共通の基盤としてそれを基に議論していこうというお話がありました。

そういったことが重要で、そういったことを行いながら、事業などを含めて共通の基盤を作っていく、今まではそういったことのために開発から自然を守るということをやってきたのですが、一歩進めて、そういったことを整備するということによって、そういった大事なところは、街作りから外して守るのだということではなく、それを街づくりの中に組み込んで一つの大事な要素として、取り込んでの街づくりを進めていったらなと思うのです。

まあ、お答えになったかわかりませんが、とりあえず私の方からは以上です。

荒尾繁志 ありがとうございました。

大学の方で、竜谷大学の里山保全チームの林さん。大学からの視点としてお話をよろしくお願いたします。

林

構造生態学をやっています。いままでの話の中で、ちょっと生態学の立場から聴かせていただきました。

生物多様性を守るという話はよく聞くのですが、その時に大切なことはその土地らしい生物相を守ることが大切な事ではないかと思えます。どこの土地でも単に守られていけばよいということではなくて、その土地の、その土地らしい生物とは何かを知ることが大切だと、そういう点で情報を地域管理できるように構築する事

が重要だと思うのです。その時に障害になってくることは観察する人々の観察時の眼の能力とか、思考とか識別能力のばらつきとか、比較するときに問題になってくると思うのです、

それはバラバラとなった情報を集約して比較するときに、観察の際の判定能力の問題か、土地固有の問題なのかを判定する力がはっきりとしないと、何を観てゐるかがわからなくなってしまう。でボトムアップの視点で情報を共有していくことはとても重要だと思うのですが、WEBGISはとても必要だということはよくわかるのですが、観察者の目の思考、視点が偏っているのを、そのまま持ってしまう、それを補正できる全体の仕組みを組み込んだ情報共有システムを考えていく必要があると思います。お話を聞いていて、そう思いました

荒尾繁志

ありがとうございます。比較するデータと、その鑑識する目をどうやって見出すかがとっても大事だという話でした。

それでは NPO の方の桜宮自然公園をつくる会から湯沢さんにひとこと

湯沢

いきなり振られたので、なにも考えていませんでした。日頃から里山の手入れと運用の管理を行いながら、現場の立場で日頃考えてきたことを、一言申し上げます。

本日の話の趣旨からは、すこしずれた話になるかとも思いますが、ご容赦お願いいたします。

里山そのものには、5年前までサラリーマンであったのでかわりがなくて、里山シンポジウムに連れてこられて、むしろ里山って何ですかという感覚でした。

一般のサラリーマンの方々は、仕事に忙しすぎいて、若い人が見えないです。で、桜宮自然公園をつくる会でも、支えているのが“じいちゃんやばあちゃん”ばかり、今後どうするかという話では今回の総会の中で話したのですが、いかに若い人たちに参加を頂けるような里山にしていかなければならないのが最大の課題。

良い話は地域の小学校2校が来てくれるよう

になったのですが、その中で大切なことは小さい時から里山というものに親しむような環境、そういうものが大切ではないかと思って小学校の子供たちに接しています。

私たちの周囲でも土に触れないという人がいっぱいいるのです。土が汚い、野菜でも土がついたごぼう、人参、ねぎなど触れない人が何人か、触れないというのは土が汚いという変な先入観がありまして、私なども田舎のほうで泥んこ遊びをしていましたから汚れても平気なのですが。同時に私などが驚いたのは農家の家の息子さん娘さんが、農作業したことがないという人がいっぱいいるのです。農作業はお父さんお母さんじいさんたちがやっていて、子供たちには小学校の先生方が課外事業としてやっていたのですが、今後そういうことも含めて小さいうちから自然に触れさせ、土というものは汚いものではない、私たちが触れる食物を支えているものですから、小さいうちから子どもたちも、仕事を経て仕事人間になっていて疲れ果てているのです。

反面そうだから自然の中に行くことによって休まるのですよね、自分も定年になって、停職はないのですがボランエィアを始めいっぱい過ぎて疲れるのですが、里山の自然公園に行くとホッとするのですよね。

周りの人にも声をかけて少しずつ、その中に言葉で話しても伝わらない人に、里山へだましてでも連れてくるのです。そうしますと里山の中で生き生きするのですね。桜宮自然公園を造る会が必要と思っています。が、なかなかうまく若者が参加してくれないのが悩みです。今後よろしくお願いいたします。

荒尾繁志

ありがとうございます。里山に入っていくとか行かないとか、ほんの一握りの人しか入っていないのですね。企業からの方から、お話をうかがいます。

原口

私は、(株)インターリスク総研という会社で、企業と生物多様性イニシアティブというグル

ープを立ち上げたばかりです。まだ何もできていませんが、企業 16 社で、これから何が良いことなのかをまず、皆んなで知ろうというものです。勉強をし始めて、COP10 に向かって、何か提言をしていきたいと思います。私はその集まりのアドバイザーであり、普段はシンクタンクの仕事をしています。

本日ここに何で、里山保全活動の会合に参加させていただいたかという、どこの企業でも、社員の約 1 割程度はうつ病になったりしているので、社員の心身の健康の根源としても、本当に企業と生物多様性の問題は足元の問題として、どうしていくかということは重要だと考えています。

とはいえ企業の CSR の担当で生物多様性に関わりだした方々は、まだまだ頭でっかちで、具体的に自分の会社で何を、考えるべきか、すべきかがほとんど分かっていないということが実情です。

そういうなかで、やはり「ムクロジの里」の話はとてもよかったなと思います。なんとというか自然を観察するというのを、例えば普通の社員が日頃からしていて、それが結果としてモニタリングになってそれが蓄積していったということが、できたらいいなという感じを私自身思いました。

私たちの会社でも月 2 回早朝に野鳥観察会を開催しています。始業前の 30 分ですから業務には影響ないのですが、参加者は数人しかいません。かつこ悪いと思うのではないのでしょうか。あいつ仕事をしていないじゃないかと思われることが怖いのでは。

ですので、企業という観点でいえば、千葉県の戦略に実効性をもたせる場合には、企業の場合には事業所をたくさん持っていますし、社員も多数おりますので、もちろん家族もいて、それをどのようにして巻き込むかを考えることが一番重要です。

例えば、先ほどインターネットの話がありましたが、市民団体は excel とかのソフトに不慣れであれば、それを企業人に手伝ってほしいという話しをしていただくと非常に話しが始めやすい。企業の方は何をやったら良いのかほと

んど分かっていないし、参加したいと企業は 2010 年の COP10 までに、何かなんかやりたいと考えているはずです。CSR をやっているどこの会社でも何か出来たらよいが、と考えていると思います。

本日いろいろな話をうかがったので、具体的な活動をアドバイスできればと思っているのですが、本当に県戦略の中でうまく使ってもらうのをできたらよいと思います。例えば、残業を減らして、no-残業 Day を作って、里山へ行こうというような、残業分を里山に使っていただいて千葉の事業所は里山へ行こうというような（笑い拍手）ことをやらないと本当に地に足のついた企業の生物多様性にならないで、海外の NGO へ寄付しておしまいになってしまうことになります。

もう一つ、私のアイデアとしては、千葉の事業所の社員食堂は地産地消率を表示するとか、それくらいのことをやると、いま、給食会社には安値で入札となっていますので、聞かなければ食材がどこから来ているのか社員にも分からないし、一方で、“メタボ” 対策と言っておきながら、わからない海外から来た食材を食わせていたりするわけですから、それはよろしくない、そういうのは具体的に、リスクであるとして自治体から言われると企業は乗りやすいという環境にあるかなあと、いうのが実感です。

今後、また皆様にお知恵を拝借することもあるかと思いますが、今日は大変ありがとうございました。

荒尾繁志

ありがとうございました。地産地消までやっていただければありがたいですね。企業もたくさんお力を持っていることをお分かりいただけたらと思います。

もうお一人から GIS を使ってお仕事をされているのではないと思われるのですが、

根岸

アジア航測の根岸知子と申します

里山での生き物調査情報を直接 GIS に落とすことを仕事として実際にやっております。

田中先生からデータの監査をすることができないとか、業務の中で非公開とするというところまでは、進んでおりません。

ただ、私は長野のほうの里山公園の管理というようなことをさせていただいており、日ごろ感じていることとして、都市から里山へ見える方々も、里山のあり場所を知らないわけです。

私も、どこにいったらよい里山があるのかとか、里山のバージョンみたいなものの、情報を市町村の方から発信して、この街の中にもいくつものコースがあるのだよと、発信していかないと、なかならず地元の人にも、そのような里山があるのかないかかわからないという状況が、現実にあると思うのです。

緑を守ろうということが、里山が消えていくということも里山を歩かないということにも原因があると考えます。地域の自然を守らなければならないのだという、問うことが、たとえばGISの航空写真などで、ここにいくつも里山がありますよというように見られるようになるのか、

というような状況をまとめて表にできるようになると、あ、この近くのここに行けば見られるのだと、分かりやすくまとめようとする、費用もかかるのでしょ、地域の活性化にもつながると思いますし、市町村単位でできるようになれば、もっといいのかなと思います

荒尾繁志

先ほど知事からもお名前があがっていましたが、自然保護課の大木さんがお見えになっていますので、今までのお話を整理してお話をいただけたらと思います

大木

自然保護課の、「生物多様性推進室」というものができました。大木といいます。知事からあの話がありましたように今年の3月。全国初の生物多様性千葉県戦略をまとめました。早速、生物多様性センターを設置しまして、職員8名おまして、そのうち4名が研究職で県立中央博物館の方々に就いてもらっているのですが、センターを発足して早速業務を始めており

ます。

ただ正直、本来はセンターをすぐ作るのではなくて多少のどういう機能をもたせるのかを研究し、準備することが必要なのですが4月から早速やっております。

センターを中心にやっている業務なのですが、今日お話しがありましたように、データを収集して分析をするということをまず。

ただ情報の収集にしましても、やはり県の持っているデータをGISのほうに入れているところなのですが、それだけでは不十分ですから、皆様方、ノンプロフィット ナチュラリスト、もしくは専門家の方々の情報も今後活用させていただきたいと、モニター制度をも作っていきたくて考えております。そうした方々もしくは、NPOの方々の支援等も、企業の方々の支援をも行っていきたくて、

当然、県だけで生物多様性の保全とか、そのような事業ができるわけではなく、皆様方と一緒に連携しながら、そのためには戦略を作るときも同じだったのですが、集いに色々出て行って、われわれがタウンミーティングと言っていますが、もしくは県民会議の集いに出て、皆様方の意見とか政策提言とかを受けて、たとえば、具体的なシステムを作るのに皆様方の意見も参考にさせていただきながら一緒になって、モニターの制度も作っていきたくて、支援策等も考えていきたくて思っています。

県戦略を作った時も千葉方式ということで、皆様方と一緒に作らせていただきました。

また実行するときも皆様方と一緒に進めていきたくて思っています。また具体的にモニター制度等をこれからも作っていくときに、ご意見等をお聞かせいただきたいと思います。その節はよろしくお願い申し上げます。

荒尾繁志

そろそろ会場をお返ししなければならない時間です。そう、ひとつ質問が来ていますね 呉地様にきている質問をお答えいただいて、マイクをお返しいただければと思います。

呉地

質問を一ついただいています。なかなか答えきれない質問なのですが、

環境省生物多様性センターが提供している情報でも、なんでも（論文や企業の広告等）に引用可能なのか。情報提供者や編集者への著作権の問題などはないのですかという質問です。

ガンの情報をインターネット自然研究所に入れる時に、関係者で議論をしました。議論するといろいろな意見があって、なかなかまとめるということは難しかったのですが、基本的にそこに掲載されている情報は提供してよいということで掲載しています。但し利用の目的が生き物や環境の保全のために役立つ用途の場合はよいのですが、営利目的が入ってくるとそれに対しては歯止めが必要だろうと思います。今のところはっきりしたルールは使っていませんが、なにかルールを作ることが必要だと思いますが、それについて明確な回答はまだ用意ができていません。ご意見を頂ければむしろありがたいです。

2010年に生物多様性条約 COP10 が、名古屋で開催され、それに向けて何をしたらよいのかという話がありましたが、その流れの中で今年（2008年）10月に、韓国で開催されるラムサール条約締約国会議 COP10 があります。これは3年ごとに開催され、アジアでやるのは15年ぶりで、アジアらしい決議をあげようと日韓 NGO で3年

ほど前からその準備をして来ました。今回は日韓政府の共同提案でアジアの水田の生物多様性の価値についての決議をあげるということになりました。両国とも農水とのやり取りがあって結構大変だったのですが、いまラムサール条約の WEB サイトにもその決議案が掲載されています

今回のラムサール条約会議では、「湿地としての水田」が注目されることになるのですが、里地里山には水田環境があります、これは次の2010年の生物多様性条約 COP10 会議にもつながっているし、農水省の生物多様性の窓口になっている環境バイオマス政策課も、水田と生物多様性に関しては非常な関心を持ち、2010年には具体的に何かをするために、かなり本気になって動いています。里山と水田を絡めたところから活動をしていくと、非常に素晴らしい取り組みが、日本から発信できます。アジアから世界に発信できる切り口が、これから大きなうねりをつくってゆくのだと思います。

荒尾繁志

ありがとうございました。それでは座長にマイクを回します

ま と め

里山シンポジウム実行委員会事務局長&第12分科会代表 荒尾稔

本日は「里山とWEBGIS情報の活用」分科会に、各方面の方々のご参加をいただき、大変ありがとうございました。時間を延長しての熱のこもった話し合いが出来て、本当に感謝しております。

最後に、分科会責任者として、まとめ的に、一言申し上げたいと存じます。

「里山とWEBGIS情報の活用」は、いままでこのような議論がなされていないこともあります。今回を契機として、これからも継続的に意見交換と事例報告を主体にして、新分野として次に進んでいけるなどという確信を持たせていただきました。

と同時に、この分科会での議論こそが、生物多様性を基礎に置きながら、里山を再生させるためにはどうしたら良いかの方向性を探る上で、とても素晴らしい、いろいろな方法論の在り方が少し見えてきたのかなと感じられるようになりました。

まず、今回のこの分科会は、私どもが構築してきた「里山シンポジウム委員会」の22ある分科会の一つであります。

同時に、この里山シンポジウム実行委員会は、もともと堂本知事の発議された、全国初の「里山条例」を、千葉県民に知らしめるための啓発目的で発足しています。早や5年目に入ります。

そこで、里山の問題を考える上で、6年目としては「啓発ということから、実務、実証」の段階に至ったと事務局の立場として考えておるわけです。

国は国、県は県、市町村は市町村という行政的な立場と、企業は企業としての論理があって、明確な立場というものがあります。里山の行政的な立場とNPO的な立場で考えたのでは、あくまでもトップダウンの考え方となってしまいます。地権者側の明確な意思表示、そして立場が

確立されていないというところに問題の根っこがあると考えます。

現状では、新しい時代の物づくり技術を使った生産技術や、コミュニケーション習得技術と、従来型のものづくりとのギャップもあって若者が参加しにくく、肝心の農家や林業、漁業に携わる地権者の皆様方の、自律性や自発性がなかなか出てこない。当事者の意欲がなければ、里山がなかなか立ち直れないという現実もはつきりとしてきています。

里山を担っている地権者としての農家の方々、あるいは漁業の方々が、自分たちの持っている農地を、あるいは海や沼の土地をどう生かして、そこをどうなりわい(生業)として、生産の場としていけるか、同時に日本の里山を構成してきた地域、その中で生物多様性をきちっと保全し、明確な第一次の生産業者なのだという明確な立場を固められるかが、一番大事なことではないかと考えます。

同様に都市住民では、インターネットで代表されるITによるコミュニケーション手段でも、情報が膨大に蓄積され、大量に消費される。携帯電話とかパソコンでは、逆に個人の情報が分断され、情報の縦割り化、孤立化と、それも大きな原因ともなって、親子関係とか学校とか、地域での触れ合いなど、人間関係の希薄化が、しかも急激に進み、社会全体の崩壊さえ予感されるころまで突き進んでいるのが現状です。さらに日本だけでなく昨今は世界中が、同じ流れに乗ってしまってきています。

それもあいまって、千葉県内での里山でも、都会と田舎、新住民と地域住民、お互いにうまく溶け込めず、地域全体で融和ができないままに、年数だけが経ってしまった感じです。

大切なことは、地域ごとの事実情報を共通プラットフォームの形で集積し、それを基本に議論するという、一つのITを駆使した新しいコミュニ

ケーションの在り方の再構築を考えていかなければならないのではないかと感じます。

「里山に託す私どもの未来」が私どもの中心テーマです。発足時に中心テーマとして掲げてきています。これ以上深い意味をもった言葉はないと、改めて確信しています。

「里山はなりわいの場、ものづくりの現場であり、アイデアを紡ぐ、まさに実験工房」としての場であると考えます。

いま最も求められているのは、温故知新「古きを知って新しいものを生み出す力」です。

最新の科学技術を駆使し、しかも日本の新たな生き方を、まったくの基礎レベルから再構築できる場として、里山は存在していると確信しています。

IT技術を駆使しながら、日本らしい、循環型の社会構築で、皆が楽しく生きていける社会を再構築していけるのか、それが、まさに里山の再生力であり、農業や林業などの生産者が、本来の立場を再構築して獲得するための技術体系だと確信ができました。

里山の再生と保全という、「里山シンポジウム委員会」の果たすべき役割と目的からいいますと、一番大切な情報を有効に生かし、最新のIT技術と組み合わせることによって、まず、なんとといっても地域の、若者を主体とした、新たなコーディネイターを育てていく必要性があります。

そして人材育成と同時に、里山をも再生できるような新たなパワーを、IT技術と、地域に残る貴重な技術ノウハウや知恵をうまく結び付けて、あらゆる加工度から、多面的な「ものづくりのパワー」を生み出していけるのか否かにかかわっていることを痛切に、実感として感じてきています。

すべての面でのボトムアップによって、地権者である農家や林業、漁業者や市民が、緻密に地域情報を集めて、絶え間なく、飽きることなく、それをデータとして集積することが先決であるかと思えます。

その過程で、里山の事実を知る、現実を把握する。そして、「生きものとしての」年間単位で

の里山のリズムをつかむ。そこで蓄積された情報を、その調査に参加しているメンバーと共有する。その上で、都道府県や県や国の生物多様性センター等で集積した基礎データ、各種の地域データ等をさらに、市民ベースでも共有できる仕組みとして、統合し融合することができるようになってはじめて、なりわい(生業)と、新たなコミュニケーションの再構築にも、大きくつながっていくのではないかと思います。

今回、まず、

山崎様が発表されました、里山単位での「ムクロジの里」での「生き物調査」での実証は、まさに新しい時代での里山の再生に向かったの大きな確立方法をご提示いただけたのではないのでしょうか。なんとといっても自分の好きなことをやって、それが生きがいと。自分なりに何年も何年のかかってもフォームを作りながらそれをもって地域の方が共同して、その里山の隅々までが、年間での季節ごとの植生や、魚や蝶や、分かってくる。それが、参加者全員に情報として共有される、それが「ムクロジの里」での山崎様の話ではないかと。

かって、里山所有者が、自分の畑として、春のたけのこはどこに、秋のキノコはどここの木の下に、という自然が生産してくれた収穫物を得るために努力した、と重なります。

呉地様が環境省生物多様性センター、インターネット自然研究所「全国ガンカモ飛来情報」にて、国の管理する情報と、ナチュラリストや研究者の方々が膨大に蓄積した情報が共生して、融合された環境が公開されています。そのシステム開発ができるまでの過程を、ご発表いただきました。また、「ふゆみずたんぼ」という、全国各地で実践される新しい農法確立と、それを側面で支える「たんぼの生き物調査」では、その手法の発見から実践に至る過程で、考えられないくらい創造性と、たんぼへの生物による発酵技術の活用、抑草技術の開発など、先駆者として高く評価されています。

日本の農業現場で2,000年以上蓄積してきた先人の多くの知恵を再発見したということです

寒川様の、「ぺたぼ一ど」の使い方は、はじめ

に事実情報を速報で集めて、双方向で議論するという。まさに IT を駆使した新しいコミュニケーションの方法を、八千代市で実証しながら提案いただきました。

田中様からは、市民が収集した市民情報を、それぞれの地域のコーディネーターの方々が自分で整理して、いつだれが観察し、報告し、誰が監査したかという順序で、まとめ上げてしっかりと監査を行い、その中から行政に報告する。あるいは行政の情報と自分たちの持っている市民情報とを合体して一緒に統合 GIS の形で、分かりやすくよく見える姿で具体的な情報としてインターネット等を介して公開していく手法に関して、実際に原体験された経験をお話いただきました。市民による自律性と自発性が、そしてそのなかで、監査制度をも取り上げた形で、それがボトムアップとして収集されてこそ、すぐれた情報となるということを強く主張され、私どもと同じ認識と感じました。

今、里山のことは、実践の段階であると考えたとき、里山を担う方々や地権者の方々とともに、その各分野で、先駆者であり素晴らしい実践活動を通して、田中様や呉地さま、山崎様や寒川さまは、優れたコーディネーターとしても最高の方々だと思っています。

いずれの方々も実践の場で、試行錯誤を繰り返しながら、練りに練った書式(フォーマット)を作り上げられてきています。実践し、評価し、改訂し、最後に書式を固められています、これが実は情報システム構築で成功するためのセオリーです。

その上で、県や国の生物多様性センター等と、情報面での共生を行い、生活に役に立つ情報を発信することの方法をも、実践すべきプロセスの在り方が、この分科会のなかで、多様に見出されてきたのではないかと考えています。

パネラーの皆様方からの真摯なご報告をいただきましたこと、そして、情報の共有そのものが、具体的にどうあるべきかの、若干の、指針となるものが見えてきたのではないかと考えています。その成果はとても素晴らしいと考えています。

県や、国も生物多様性センターのご関係者か

らもご発言を頂き、皆様がたのご尽力によって有益な分科会として開催できましたことを本当に感謝しております。本日は、本当にありがとうございました。

荒尾繁志

ありがとうございました 本当に長い時間でしたが、京都から、上越から、宮城県からおこしいただいております。本日お話を頂きました方々に感謝の意を込めて改めて拍手をよろしく願いたします。ありがとうございました。

(大きな拍手)